

## 「尋ね求めよ、見いだしうるときに」

### ヨハネによる福音書 7章 25～36節

日本語の邦訳版が出版されたのは 1997 年でしたから、それからもう、かれこれ 27 年になるでしょうか。御記憶の方もおられるかと思いますが、当時、『ソフィーの世界』という本がしばらくベストセラーとなって、話題になりました。なぜ話題になったかという、それが小説やエッセイといった いわゆる読みやすくてとっつきやすい本ではなく、普段はあまり売れない「哲学」の本だったからです。ちなみに、副題には「哲学者からの不思議な手紙」という言葉が添えられています。と同時に、その一方でまた 興味深く思わされたのは、著者がノルウェーの高校の元教師で、児童や青少年向けの作品を書いている人だということでした。ヨースタイン・ゴルデル (Jostein Gaarder) という人ですが、つまり、『ソフィーの世界』は青少年に向けて書かれた本で、ノルウェーなど あちらの国では、「自分はこの人生をどう生きるのか？」といったことを、そうした若い頃から考えさせられている。「本当に人間らしい生き方とはどんなものなのか？」といったことに若い時から心を向けるよう 配慮がなされている、ということに少なからず感心させられたのを覚えています。

ソフィーというのは主人公の少女の名前で、14 歳の女の子ですが、その本の中に 次のような一節が出てきます。人は時に、大切なことに気づくのに遅すぎることがある。人生の大事な時を無駄に過ぎ去らせてしまうことがある、と ソフィーが心の中で 呟く場面です。ソフィーは、次のように呟きます。

・・・わたしは生きている、と考えれば考えるほど、この命はいつか終わる、という考えもすぐに浮かんでくる。その反対でも同じだった。わたしはある日 すっかり消えてしまう、と強く実感して初めて、命はかぎりなく尊い、という思いもこみあげてくる。まるで 一枚のコインの裏と表だ。ソフィーはそのコインを 頭の中でいつまでもひっくり返していた。コインの片面がくっきりと見えれば見えるほど、もう片面もくっきりと見えてくる。生と死は一つのことの両面なのだった。・・・

ソフィーは、祖母が自分の病気を告げられた日に・・・言っていたのを思い出した。「人生はなんて豊かなんでしょう、今ようやくわかった」

たいていの人が、生きることのすばらしさに気づくのが病気になってからだなんて、悲しい。みんなが謎の手紙を郵便箱に見つければいいのに。

「謎の手紙」というのは、ソフィーのもとに届く不思議な手紙です。その手紙に導かれ、ソフィー

は人生の大切な問題について考えるようになります。そして、<sup>つぶや</sup> 眩くのです。「たいていの人が、生きることのすばらしさに気づくのが病気になってからだなんて、悲しい」。たしかに、ソフィーの言うとおりにかもしれません。もっと早く気づけば、もっと素晴らしい、もっと豊かな人生が待っていたかもしれないから……。謎の手紙は こうして、ソフィーのもとに次々と届けられ続けます。それはいわば 哲学の通信講座とも言えるもので、実際、著者ゴルデルの意図もそれに近くあるように思われます。内容的には西洋の哲学史ですが、実に良く出来ていて、青少年の若者にも読みやすい、<sup>ちまた</sup> 楽しく分かる入門書となっています。ひょっとすると、<sup>ちまた</sup> 巷の書店に並ぶ大人向けのそれらより数段 <sup>ゆえん</sup> 優れているかも。ベストセラーになった所以でしょう。

今月は7章の25節から36節が聖書の箇所、前回に続き、神殿における 主イエスと人々とのやり取りが書き留められています。そんななか、そこで、どこか気にかかる言葉を 主イエスは口にされます。後段に記されているひと言ですが、その場のユダヤ人たちも同じで、なんとも気になったのでしょうか。意味不明なその言葉に、もしかすると、理由も分からぬまま <sup>おぼ</sup> 心にざわつきを憶えたのかもしれません。主イエスの言われた言葉をそのまま、もう一度繰り返して、「互いに言った」(35)と書かれています。それは「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。〔そうしたら〕あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない」(33～34)との主イエスの言葉であり、「『あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない。わたしのいる所に、あなたたちは来ることができない』と・・・はどういう意味なのか」(36)と、その言葉をそのままに繰り返すユダヤ人たちのそれです。同じ言葉が二度、丸ごと繰り返されている。それだけでも、なにがしか大切なことがそこで示唆されているように思われるのですが、いかがでしょうか。そして それは、初めに御紹介したソフィーの<sup>つぶや</sup> 眩きともどこか無縁ではない。通じるところがあるように思われています。33節、34節に記されている イエス・キリストの言葉です。今しばらくは、まだ時間がある。しかし、時を逸したら、私はもういなくなる。事には時に、遅すぎて 大事なものを無駄にしてしまう、失ってしまうということがあるものだ、との響き。言葉の背後に、そんな響きを感じられはしないでしょうか。そうした意味合いがそこに込められているとしたら、そこには、冒頭のソフィーの眩きに通じるものがあるように思われます。「たいていの人が、生きることのすばらしさに気づくのが病気になってからだなんて、悲しい」と口にする、ソフィーのその眩きです。そこで、今月は一聴き取るべき語りかけは一つならずあるでしょうが—この周辺に焦点を当て、聖書の語りかけを探ってゆけたらと思います。イエス・キリストはかつて、こう言われました。「探しなさい。そうすれば、見つかる」(マタイ7:7)。けれども、今、こう言われます。「あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない」(34)。いったい、どういうことなのでしょう。これらを<sup>つな</sup> 繋いでくれる言葉はあるのか。あるとしたら、それは聖書のどんな<sup>みことば</sup> 御言葉か。御一緒に 聖書を読み進めてゆければと思います。

時は、ユダヤの3大祭の一つ「<sup>かりいおさい</sup>仮庵祭」の<sup>さなか</sup>最中。旧約の時代に奴隷のエジプトを脱出したイスラエルの民が荒野で仮の住まいを、すなわち「<sup>かりいお</sup>仮庵」を設けて旅を続けたことを記念する祭りで、人々は神殿に向いて祭りを行なっていました。その祭りの<sup>さなか</sup>最中の神殿で、主イエスが白昼堂々、公然と教を説いています。それを<sup>ま</sup>目の<sup>あ</sup>あたりにして、25節、「エルサレムの人々」が驚きます。「これは、人々が殺そうとねらっている者ではないか」(同)。エルサレムの町に住む人たちにとって、主イエスがユダヤの指導者たちにその命を狙われていることは周知の事実でした。ですから、26節、「あんなに公然と〔すなわち、大胆に、自由に〕話している」とビックリしています。ですからまた、「〔なのに〕何も言われぬ。〔ということは、もしかしたら〕議員たち〔も〕、この人がメシア〔すなわち、救い主〕だということを、本当に認めたのではなからうか」(同)と、一瞬、そんな思いがよぎったのでしょう。この「議員たち」というのは、最高法院と呼ばれた当時のユダヤ社会の最高機関のメンバーたちのことですが、もしやその議員たちまでもが・・・とのそんな思いです。とはいえ、それはしかし、すぐにも消えたようです。そんなわけ、あるはずがない。なぜなら、「わたしたちは、この人がどこの出身かを知っている。メシアが来られるときは、どこから来られるのか、だれも知らないはずだ」(27)からだ、と。つまり、イエスがガリラヤの<sup>いなかまち</sup>田舎町のナザレの出身で、大工の<sup>むすこ</sup>息子であって、その両親や兄弟姉妹が誰であるかも、自分らは知っている。<sup>うじすじょう</sup>氏素姓を知っている。そんな人間のどこに、救い主らしきがあるというのか。神の所から来たというなら、どこか分からない、それらしく神秘的なところがあるはずだ。こんなに何もかも分かっているただの人間が どうして救い主なのか、というわけです。実際、ユダヤ教の教師の言葉として 当時、こんなふうにも言われていました。「全く意表を突いて来るものが、3つある。メシアと<sup>もう</sup>儲けものと<sup>さそり</sup>蠍である」。要するに、救い主・メシアは ちょうど、儲けものが<sup>うんぬん</sup>潮ぼたのように転がり込んだり、潜んでいる蠍が突如 現われたりするように、予想もしない時に驚くような仕方で突然 その姿を現わすというのです。考えてみれば、どこかでスターやヒーローの到来に期待し、時にそれが<sup>つな</sup>宗教の教祖崇拜にまで繋がっていくという、人の心情や社会の風潮。それは今・この時代のこの時にも通じるとともに、それにとどまらず、時代を超えた 私たち人間の一般的感覚と言えなくもないのかもしれませんが。しかしながら、一民間信仰的とも言えるでしょうか—そうした一般的な風潮はともあれ、聖書それ自体はどうかと言え、救い主の<sup>うんぬん</sup>生まれについて、聖書はそれなりに語っています。救い主はダビデの家系に与えられ、ベツレヘムに<sup>うんぬん</sup>生まれる云々というのも、その一つです。さらには、その救い主の<sup>つな</sup>姿や生涯についても、聖書は少なからず書き記しています。そして、その中には間違いなく、神秘的でない一面を<sup>えが</sup>描いたものもあるわけです。「彼は<sup>えが</sup>軽蔑され、人々に見捨てられ、多くの痛みを負い、病を知っている。・・・わたしたちの罪をすべて、主は彼に負わせられた」(イザヤ 53: 3、6)とあるのも、その一つと言えるでしょう。ですから、メシアは氏素姓の知られぬ者として、いつ・どこからかも分からぬままに突然、意表を突いて現われる、とは必ずしも言えない。少なくとも、聖書に基づくかぎり、必ずしも そうとは言えないのではないのでしょうか。

かつて、ハリー・エマソン・フォズディック (Harry Emerson Fosdick) というアメリカの牧師

が次のように語りました。アメリカを代表するプロテスタント教会の一つ、ニューヨークのリバーサイド教会の初代牧師で、著名なユニオン神学校の教授も兼任。優れた説教家として知られ、全米向けラジオ放送での夕拝説教は多くの聴き手に感銘を与えました。神学的に進歩的な立場にあり、二つの大戦をまたいで 社会的にも影響を及ぼした牧師でしたが、そのフォズディックの言葉です。

私は宇宙の果てなる神を見、驚きの声を上げます。が、私の愛するのは 近きにいます神。美しきもの、愛あるもの、誠実なるもの、真実なるもの。これらのあるところ、神は私たちの近きにおられます。神のすべてを信じられる者など、一人もいません。神は 信じる心をもってしても大きすぎ、捉えることができないからです。信じられるだけの神を信じる。そこから始めましょう。近きにいます神に目をやり、そこから、全き理解を目指して 歩みを進めましょう。

神については たしかに、分からないことがたくさんある。神は大きすぎるから。しかし、大仰おおぎょうで華々しく、いかにもそれらしくあるだけが神の御姿みすがたなのではない。むしろ、目立たずとも、近くにあつて、良きものに息づいているところ。神のしるししるしというのは、そのようなところに認められるのではあるまいか。私たちにも分かる、そこから始めよう。そして、それこそが実は、神を知る 何より大切な入り口ぐちなのだ。フォズディックは、つまりは、そう言わんとしたのではないのでしょうか。そして、その極みがまさに 上述のイザヤ書の姿ではないか、と そう思わされています。人の痛みを負い、その病を知り、さらには罪までをも その身に受けようとする姿です。実際、聖書の教える救い主の姿しんというのは、必ずしも神々こうごうしくあつたり、神秘的であつたり、幻想的であつたりするものばかりではありません。むしろ逆に、一見 みすぼらしくもあり、哀れでもあり、悲しげでさえあります。けれども、聖書は実に、そうした有りようをもって、救い主の真のしるしを示そうとしているのではないのでしょうか。そして、イエス・キリストの十字架の御姿がその頂点に置かれている。聖書の目は、行き着くところ 結局、そこに据えられている。そのようにして、そのところに 私たちも同じように目を凝らすよう、繰り返し語りかけては招いているように思われます。美しいもの、愛あるもの、誠実なもの、真実なものが比類ないかたちで、そこに現わされているからです。真実 救い主と言うべきお方の御姿がそこにあるからです。私たちに良きものを注がれる、いのちの主のそれです。

だからこそ、主イエスは大声でおっしゃったのではないのでしょうか。28 節、「すると、神殿の境内けいだいで教えていたイエスは、大声で言われた。『あなたたちはわたしのことを知っており、また、どこの出身かも知っている。〔そのとおりの。このわたしに 神秘的なところはない〕』」。主イエスはそう言われます。がしかし、続けて こうもおっしゃられる。そして、そこにこそ、主イエスの何より伝えたかったメッセージが込められているように思われます。すなわち、主イエスは続けて、こう言われます。「〔そのとおりの。このわたしに 神秘的なところはない。

しかし] わたしは自分勝手に来たのではない。わたしをお遣わしになった方は真実であるが、あなたたちはその方を知らない。わたしはその方を知っている。わたしはその方のもとから来た者であり、その方がわたしをお遣わしになったのである」(28～29)。つまり、自分は来たいから来て、喋<sup>しゃべ</sup>りたいから喋っているのではない。遣わされてきたのだ、とそう言われたのでした。実際、ユダヤの社会では当時、救い主を騙<sup>かた</sup>る自称メシアが次々と現われていました。そして、一当時はもちろん、まだ旧約聖書しかありませんでしたが一聖書に基づかない「自分勝手に」受けのいいあれこれを語っては、信奉者を獲得しようとしていました。そうした「自分勝手に来た」者たちを指摘しつつ、主イエスはしかし、こうおっしゃられます。私はそうではない。私は真実なお方に遣わされて、すなわち真理であって 現に生きておられるお方に遣わされて、その使命を果たすためにここにこうして来ているのだ、と そう言われたのでした。

それは、これまでも一度ならずなされてきた、主イエスの特別な宣言に通じるものと言えるでしょう。どういう宣言かと言えば、それは、「私は神を知っている。私の父なる神だからである。そして、私と父とは一つであり、私はそこから遣わされてきた」という 驚くべきものです。しかも、その宣言が誰に向けてなされているか。そのことに気づくとき、その驚きはさらにも深いものとなります。誰に向かって、この宣言がなされているか。自分たちは神に選ばれた民だと自負していた、いわゆる選<sup>せん</sup>民・イスラエルの人々に対してです。自分たちは 神に選ばれている。言い換えれば それは、自分たちは神を知っている。自分たちには 足りないところや欠けたところはない、ということです。そして、それはまた、主イエスの言い回しに倣<sup>なら</sup>うなら、自分たちは神に認められた者であって、異邦人のように咎<sup>とが</sup>められる罪などない、という主張ともなります。そんなふう<sup>に</sup>に自負していたユダヤ人たちに対し、「あなたたちはその方を知らない」(28) と、主イエスはそう言われたのでした。ユダヤ人たちが怒<sup>おこ</sup>ったのも当然と言えるでしょう。30 節と 32 節に「人々はイエスを捕らえようとした」「イエスを捕らえるために」と記されていますが、これらはそのことを物語ってもいます。

それにつけても、自<sup>みづか</sup>らの足りなさや欠けについて、また自身の陰や闇の部分について、すなわちいわば罪<sup>ざい</sup>性<sup>せい</sup>とでも呼ぶべき内なる事柄について、私たちはそれらを感じ取る感性が必ずしも鋭いとは言えないのではないのでしょうか。物事 いつもポジティブに、アファーマティブに、と言われる昨今、自らの内面を掘り下げ、そこに暗部を見るのはやはり、"流行<sup>は</sup>ら<sup>や</sup>ない"ようです。できれば、見たくない。触れたくない。考えたくない。避けて通りたい。それが普通みたいです。神学的にも、私たちは神に愛されている。すべて受け止められている。だから、取り立てて そうしたことを論じることはない、と言われたりもします。ですが、聖書を読み、そこで主イエスに聴き、そして その神と向き合うとき、それだけではたして、すべて終了、一件落着としてよいのかどうか。人の本質を問い、信仰の有りようを論じる聖書の語りかけから、大事な何かが漏れてしまうのではないか。そう思われてならないのですが、いかがでしょうか。

こうした問題と関連し、一人の人の逸話が伝えられています。広く知られた逸話ですが、片岡<sup>かたおか</sup>

けんきち  
健吉という人物のそれです。片岡さんは戦前の帝国議会で衆議院の議長を務めた人で、政治家として有名ですが、ただそれだけにとどまらず、キリスト者としても その名を知られています。逸話というのは その片岡さんがキリスト教へ入信した前後のことで、罪の問題をめぐってなされた 教会とのやり取りです。有名な話で、折に触れては様々な機会に紹介されていますので、御存じの方も少なくないかもしれません。それらの中に、ある人の書かれた 次のような一文がありました。前述のように、今や流行らない類いの逸話かもしれませんが、こんな一文です。

いたがきたいすけ  
板垣退助などと一緒に自由民権の政治運動をやって、しかもキリスト者になった人で、たいへんよく知られていた人に 片岡健吉という人があります。・・・第一回の総選挙で既に代議士として選ばれまして・・・最後には帝国議会の議長となり、現職のまま死んだ人であります。名議長と謳われた人であります。しかしまた、〔日本基督教団の〕高知教会の長老として、最後まで奉仕をした人です。〔高知教会は日本基督教団全体の総会議長をも輩出している伝統ある教会ですが〕・・・この片岡健吉氏は・・・高知教会の設立の式の最初の洗礼式で初めて洗礼を受けた人であります。〔ところが〕・・・片岡健吉は長老会の試問会で試験に落ちそうになりました。この人は、イエスさまを信じていないらしい。尋ねれば尋ねるほど、それがはっきりしてくる。ただ イエスという方は立派な徳の高い人だと尊敬しているだけのようだ。私もイエスにあやかりたいと思っているだけのようだ。・・・私みたいに正しい人はないと思ひ込んでいたぐらいの人であって、私と同じように立派なイエスというような理解であったらしい。試問をした長老たちは、そう感じたらしいのです。もっとも、洗礼入会式に先立ち、宣教師の一人が指導している。〔そして〕・・・その時は、よく分かったと言ったそうです。それで受洗志願者〔の〕試問にのぞんだのに、その始末であった。しかし、そこでもなお、さまざまな事情を勘案して、洗礼式をしてしまいます。ところが、教会員になってみると、やっぱり分かっていないことが明らかになった。・・・ただ、この後の片山健吉と・・・高知教会は偉かった。教会の教師たちは繰り返し 聖書を説き、片岡健吉も何度も 聖書を読み直した。そして遂に、彼は 50 歳近くなつた頃、〔つまり〕洗礼を受けて七、八年を経たところで、ようやく本当のことが分かったと言えるようになった。そして、これまでの自分の前半生を振り返って、記録を残しました。そこで こう言っています。初めて、神の御前で自分の罪を知るようになった。これは理論上のことではなく〔体験〕上のことである。本当に神の御前にあるということが分かった時に初めて、それがよく分かった。そこで、こういう感慨を述べているのです。「キリストの神たること、之 実に難題なり」。イエス・キリストが神であるということは、まことに信じにくい。「ただかろうじて、キリストの人物の非凡なるを知れるのみ」。それが かつての自分であった。しかし、神と〔心通わ〕し、いよいよ自己の本当の姿を知るに至って、遂に「・・・我が神よ」と呼んで、この方以外に頼るものはないと知るようになった

た・・・のです。

片岡健吉はこのように述べて その前半生を振り返るのですが、この片岡さんについては さらにもう一つ、後日談があります。それは、次のようなものです。前文に続く文章からの引用です。

片岡健吉について・・・もっともよく知られている逸話は、衆議院で議長に選ばれそうになったとき、この人を議長候補として推薦しようとした仲間たちが、あなたが高知教会という耶蘇ヤソウの教会の長老をしていることが 日本の国では都合の悪いことだ。あなたを衆議院議長に推薦したいけれども、推薦しやすくするために、高知教会の長老を辞任してくれないかと頼みました。ところが この人は、衆議院議長になることよりも、高知教会の長老を名誉とすると答えたそうです。その上で、やむを得ず そのまま推薦されたのを受けて、しかも多くの人々の信頼を勝ち得たうえで 議長になりました。今考えても、それは驚くべきことです。しかし それは、主イエスこそ神であるということをよく神に分からせていただき、その前においては 自分がどんなに・・・罪人であるかということを知ったからです。その罪から解き放たれて 教会に生きるということがどんなに祝福されたことかが、骨身に染みてよく分かったからです。そのような人からすれば・・・特別なことではない。ごく自然なことでありました。

罪云々うんぬんというような こうした類いの話は、今日ではたしかに、一 諄くどいようですが一 流行はやらないかもしれません。そして、私たちが神に愛され、神に受け止められている存在であること。そのこともまた、本質的にはそのとおりにかと思われまふ。しかしながら、それと同時に、だからといって、自らの内側みづかに目をやり、その内面性・精神性を省みることうとを疎んずるとしたら・・・。そのようにして、内なる自分を脇ふたにやり、自身に蓋ふたをして 柵たなに上げたままにするようなことがあるとしたなら・・・。それはやはり、自己の有りようを見詰めるという 宗教の本質をどこかに置き忘れることになりはしないか。そう思わされています。

自分たちは 神に選ばれている。神を知っている、と そう信じて疑わなかったエルサレムの人々。また、そう教はえて憚はばらなかつたファリサイ派の人々や祭司長たち。彼らは血筋の正統性や外面の立派さを誇り、自らの内面みづかを見詰めて省みることうとに薄くなつていたのではないのでしょうか。その意味で そこには、片岡健吉の証あかしに通じるものがあると言えはしないのでしょうか。そして ですから、何かにつけ 事の内実やその本質を問うてやまないイエス・キリストは彼らにとって、いかにも神経を逆撫さかなするような存在だつたにちがひありません。だからこそ、彼らは共々、主イエスを捕らえようとしたのではないか。イエス・キリストが神から遣まわされた者であることが、彼らには受け入れられなかつたのでした。同様に、自分には 足りないところはない。欠けたところはない。自分はそれなりに立派な人間であつて、とやかく咎とがめられる理由はない。後ろ指をさされる筋合すぢあいはない、と

そう思って譲らずにいる間は、この私たちもまた 同じようなところにいるのかもしれませんが。そして そのとき、主イエスが神からのお方であることも 恵みの主であることも、私たちには分からずに過ぎるのではないのでしょうか。

ですから、聖書は 35 節で言っています。「ユダヤ人たち〔すなわち、ユダヤのリーダーたち〕が互いに言った。『わたしたちが見つめることはないとは、いったい、どこへ行くつもりだろう。ギリシア人の間に離散しているユダヤ人のところへ行って、ギリシア人に教えるとでもいうのか』」。主イエスが 33 節、34 節で「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる。それから、自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない」と言われたのに対し、互いにそう言い合ったのです。いましばらくしたら、自分は十字架に上げられ、託された使命をそこで果たして、そして お遣わしくださった神の御許へ戻る。それが、イエス・キリストの言わんとされたことでした。けれども、自分たちは神を知っている、と自負して譲らなかったユダヤ人たちには それはそもそも意味不明で、何のことか理解できずにいたのでしょうか。それに、たとえその意味が分かったとしても、それはとても受け入れられることではなかった。だから 彼らは、外国に散らばっているユダヤ人の所に逃げて行って、そこで現地のギリシア人に教えるとでもいうのか、と そう言い合ったのです。皮肉にも、と言いましょか。これは 後年、弟子たちの働きを通して現実のものとなるのですが、ヨハネ独特の暗示的な言い方でもあります。

無知は 見えるものを見えなくする、と言われます。また、頑なさは 受け入れるべきものを受け入れられなくする、とも言われます。ユダヤの人々は そのようにして、真の神に気づかず、これを蔑ろにしてしまいました。そのようにしてまた、神の御子を認めず、これを拒んで、十字架へと追いやったのです。事は、聖書の時代の、聖書の人たちだけのことではないように思われます。今を生きるこの私たちにもまた 同じことが言えはしないか、と。その意味で、私たちも心して、無知と頑なさから遠ざかりたいと思わされています。

がしかし、「イエスの時はまだ来ていなかった」(30)。十字架までには まだ、なすべきことが残っていた。だから、イエス・キリストはまだ 人々の手にはかからなかった、と 聖書はそう記しています。

こうして、主イエスはその働きをなし続けられます。「今しばらく、わたしはあなたたちと共にいる」とおっしゃって。がしかし、それはまた同時に、けれども いま少ししたら 私はあなた方のもとを去る、ということでもあり、それゆえ 主イエスは続けて「自分をお遣わしになった方のもとへ帰る。〔そうしたら〕あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない」と言われたのです。いましばらくしたら、私はいなくなる。そうしたら、そのとき たとえそう望んでそう願っても、あなたたちはもはや この私を見つけることができなくなる、と。どこか、寂しくも厳しくも響く言葉ではないのでしょうか。ですが、そこにはやはり、一つの現実があるように



も思われます。「時」という、その中で私たちが生きる現実です。時というのはやはり、私たちがいつでも好きなように扱えるものではない。そうできない時もそこにはある、という現実です。

聖書に「あなたたち」とあるのは、聖書ではたしかに「ファリサイ派の人々」(32)や「祭司長たち」(同)であり、また主イエスを捕らえるために彼らが遣わした「下役たち」(同)かもしれません。さらには、祭りで神殿に詣で、そこで騒ぎを聞きつけ 辺りに群がっていた一般の人々も含まれるのかもしれませんが。が いずれにせよ、聖書が伝えたいのはただそれだけのことなのか。読む者に語りたいのはただそれだけなのだろうか、と そう思われてなりません。事はたしかに「ファリサイ派の人々」や「祭司長たち」や、また「下役たち」やそこに群がっていた人たちのことではあるものの、だからといって、それははたして 私たちと無縁の「あなたたち」なのでしょう。この私たちと関わりのない、他人事の「あなたたち」と言えるのかどうか。私たちの場合、言うまでもなく、目の前から主イエスがなくなってしまうわけではありません。むしろ、イエス・キリストは私たちの前に来てくださっている。が、来てくださっているけれども しかし、私たちはそれに想いがいかず、気づかなくなってしまう。そのことを考えもしなくなってしまう。そして、そのようにして 主イエスが見えなくなってしまう、ということがあるのではないのでしょうか。

しかも、です。しかも、時は限られています。肉体の元気は衰える。心の強さも精神の力も、いつまでも同じように続くとはかぎらない。そのうえ、予期せぬ事故や病も……。これは、悲しくも、人生という 私たちが生きる時の現実ではないのでしょうか。そして、「美しきもの」や「愛あるもの」を、また「誠実なるもの」や「真実なるもの」を感じ取る感性。それもまた、惰性の流れに身を任せていると、いつの間にか鈍くなっていきます。時に、取り返しのつかないほどにも。そのようにして、自身の内なる陰や闇の事柄について、それらを思う意識が薄れていく。そして、そこに希望の光を射し込んでくださるイエス・キリストを想い求める思いも……。自らを省みる時、そうした危険性がないとは言えない。そう思わされてなりません。そうなってしまうと、主イエスの言われた言葉、「〔わたしはいなくなる。〕あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない」とのその言葉が この私たちの現実ともなりかねないのではないのでしょうか。私たちも主イエスを見つけることができなくなってしまう……。

初めの問いに戻りましょう。「探しなさい。そうすれば、見つかる」。「あなたたちは、わたしを捜しても、見つけることがない」。これら 主イエスの二つの言葉を繋いでくれる御言葉です。それははたして、どんな御言葉でしょうか。それは、「主を尋ね求めよ、見いだしうるときに。呼び求めよ、近くにいますうちに」。イザヤ書55章6節のそれです。

そして、この御言葉のとおり、近くにいますうちに 主を呼び求め、見いだしうるときに 主を尋ね求めて、そのようにして イエス・キリストと共に神の御許へと帰っていかれた一人の信仰者の姿を御紹介して、今月の終わりとさせていただければと思います。すでに隠退されていますが、日本キリスト教団の加藤常昭牧師の著書からです。

・・・私が愛読するドイツの新約学者シュニーヴィントという人の生涯を素描する文章をもう一度読みました。シュニーヴィントは・・・第二次世界大戦がドイツの敗戦をもって終わりましたとき、ソ連占領地域、つまり東ドイツに包含されたハレの町に残りました。西側に逃れることができましたけれども、その地に<sup>とど</sup>まり、教授でありましたが、ハレの町の人びとの牧師となり、愛を尽くして人びとの悲惨の状況を和らげるために献身しました。その疲労の果てに召されたそうです。とてもすぐれた牧師であり神学者でしたけれども、体の痛みのひどい病気になった。痛くて祈れなくなったとはっきり記されています。シュニーヴィント先生はしかし、痛みに耐えながら、<sup>かたわ</sup>傍らではらはらしながら見守っている人たちに言われたそうです。わたしはもう祈れない。痛みがひどくて祈ることもできない。しかし、わたしのために、わたしが祈れなくてもわたしのために祈ってくださる方がいるから、その方に取りすがすることはできる。そして死ぬ、と。そのようにして死なれました。

イエスが道であられるということは、それほど確かなことです。皆さんにとっても確かなことです。皆さんも、その確かな祝福のなかにあります。ご自分におけるキリストの祝福を固く信じていただきたいと思います。

イエス・キリストは言われます。「わたしは・・・自分をお遣わしになった方のもとへ帰る」。しかしそれは、尋ね求め、呼び求めるこの私たちを残したまま、置き去りにしたまま帰ってしまうということではありません。十字架を目前にしたあの<sup>さいご</sup>最後の<sup>ばんさん</sup>晩餐の席で、不安がる弟子たちに向かって主イエスが言われた言葉が響きます。主イエスははっきりと約束してくださいました。「心を騒がせるな。神を信じなさい。そして、わたしをも信じなさい。・・・行ってあなたがたのために場所を用意したら、戻って来て、あなたがたをわたしのもとに迎える。こうして、わたしのいる所に、あなたがたもいることになる」。同じヨハネ福音書の14章1節以下の言葉です。また戻ってきて、私たちを迎えてくださる。その約束のとおり、<sup>よみがえ</sup>甦りのキリストが生ける聖霊として、私たちのもとにまた来てくださっている。私たちの希望はここにあるのではないのでしょうか。この希望の中にあつて主を尋ね求め続けたい、呼び求め続けたい、と願っています。見いだしうるときに。近きにいますうちに。

#### 〔祈り〕

愛する神様。

御子<sup>みこ</sup>イエス・キリストの十字架と<sup>よみがえ</sup>甦りのいのちが<sup>あまた</sup>数多の人々を生かし、主の体なる教会を支え、生かし続けてくださいました。その恵みをまずもって、何より感謝いたします。

しかしながら、その一方で、私たちは言いようのない不安と<sup>あ</sup>当て<sup>ど</sup>所<sup>おぼ</sup>なさを憶えることがあります。しかも、いのちの主なる御子<sup>みこ</sup>を慕い求めるその思いも、決して十分なものではありません。どうか、あなたの伴いを信じ、その導きと支えを祈り求める思いを深く<sup>しんし</sup>真摯なものとしてください。

わたしの心に・・・

あなたの御手<sup>みて</sup>をいつも、いかなるときも伸べ続けてくださいますように。

願わくは、御名<sup>みな</sup>を崇めさせたまえ。御国<sup>みくに</sup>を来たらせたまえ。御心<sup>みこころ</sup>の天になるごとく、地にもなさせたまえ。

主<sup>みな</sup>の御名<sup>みな</sup>によって願い、お祈りいたします。

アーメン